



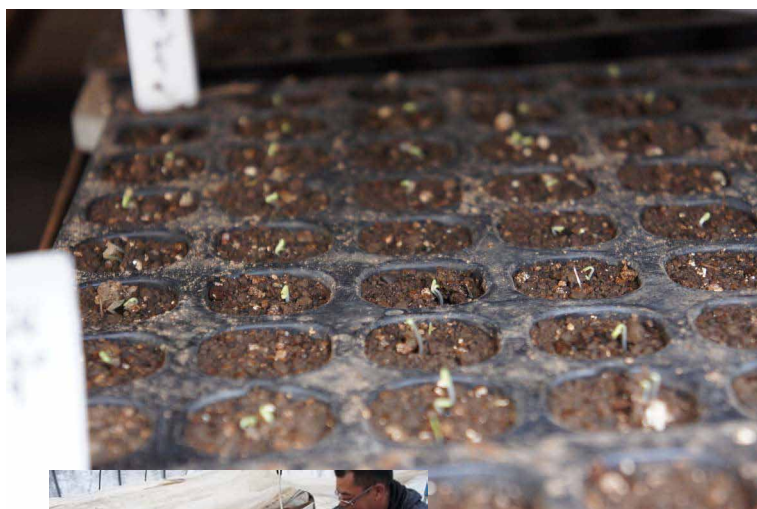
ハウスの中ですくすく育つトマトの幼苗。

種子って何だろう

播けば芽が出て葉っぱが出て、花が咲いたり実がなったりする・・・そこから作物が命を永続的につないでいくために必要な種も出来る。『一粒万倍』の言葉の通り、必ず蒔いた種よりびっくりするほど多くの種が取れる。またそのびっくりするぐらい多くの種からさらにびっくりのn乗の種が取れる。

それは、自然の太陽エネルギーや、雨や、風や、土（動植物や鉱物、微生物の循環）という無料のエネルギーが育ててくれる部分が大きいからです。

だから種は農家にとって、人類にとって、そして生きとし生けるものにとって、無限に大きな資産価値のある財産なのです。こんなに利回りの良い債券はほかにはありません。また、種子は命を



薄暗くした保育器の中で発芽を始めたレタス

作る食べ物の元ですから、生殺与奪の権を有しているのです。農家は売る為、売れる為の作物だけではなく、命の元を作っているのです。

種子戦争って何だろう

だから種苗会社はその大きな絶対的な利権と生殺与奪の権を独占しようとして、あの手この手で個人の農家が自家採種出来ないように、小さな種苗会社が成り立たないように、グローバルな規模で独占競争を激化させているのです。

種子戦争と言うのは、単なる利権や経済競争ではなく、最も根源的な生存競争、命を守る砦でもあるのです。



それぞれの苗に合わせた肥料を配合しポット用の土を作ります

自給自足の要諦は自家採種

前号で、貨幣経済に翻弄されない為には、衣食住全般に渡って、自分に必要なものは自分で作ることが出来る、メンテすることが出来るという自給自足的なタフな生活力や能力が必要な事を書いてきました。

確かに住む家も、着る物も、自然エネルギーも大変大切なものですが、しかし、自給自足の要諦は自家採種にあるのです。昔農民は、飢饉や自然災害の時、何は守らなくても種だけは守ってきました。餓死寸前でも、種モミだけは食べないでギリギリまで我慢していま



いよいよ今シーズンの畑もスタートしました。



子もあり、農家は自家採種出来ないものと思い込んでいる場合も多いのです。

種を買うという事の意味するもの

農家が、自分の作る作物の種を外部からお金を出して買うようになった、この段階で農業が、貨幣経済のループに組み込まれていくスタート地点でした。

次回も、種子について掘り下げてみたいと思います。

種苗会社の誕生

では何故、現代の農家は自家採種に固執しなくなったのでしょうか。社会の分業化が進み、種苗会社と言うものが出来、自分で面倒な種取りをしなくても、お金で種が買えるようになったからです。経済の論理だけで考えれば、手間ひまかけて種取りして、揃いの悪い、市場価値や、収量性の低い、収穫の効率的でない、個体差の大きい自家採種の種を使うより、その分の農地と時間を、作物を少しでも多く作る為に向けた方が経済効率が良いからです。また、企業戦略として、雄性不稔種子を使って、自家採種出来ないように作られたF1種



・・・つづく

お知らせ

今年から、札幌の小別沢農場を閉鎖し、仁木農場に統合することに致しました。

小別沢農場の福田君は、本人と本店店長の希望で本店勤務となり、池田さんは、これも本人の希望で、仁木農場で働いてもらうことになりました。

今まで、使っていた小別沢農場は、もと、小別沢農場の研修生で、去年から、小別沢農場の半分を借りて新規就農していた「かわいファーム」の川合さんが引き継いでくれる事になりました。今後は、仁木農場とかわいファームで作る作物を分担し、連携協力しながら、まほろばに供給して行きたいと思います。

今まで、協力して戴いた多くのボランティアの皆さま、心よりお礼申し上げます。本当に有難うございました。

今後は、さらに皆様に喜ばれるような、おいしくて、安全で、生命力の強い作物を作る為に、努力していきたいと思います。



福田君は本店勤務に（しばらくは農園と行ったり来たりになりそうです）、池田さんは仁木農場勤務に。それぞれ新たな出発です。



これまでお世話になったまほろば自然農園第一、第二農場。今年からは川合さんが引き継いでくれることに。

